

『 <b>日影丈吉傑作館</b> 』レジュメ
<p>2016年11月12日</p>
<p>初めに〜日影丈吉について、或いはどうして日影丈吉なのか〜</p>

【引用1】日影丈吉のプロフィール（『日本人名大辞典』より抜粋）
**1908–1991**
昭和後期-平成時代の小説家。明治41年6月12日生まれ。昭和31年「狐の鶏」で日本探偵作家クラブ賞,平成2年「泥汽車」で泉鏡花文学賞。G.ルルー「黄色い部屋」など,フランス-ミステリーの翻訳が多数ある。エッセイに「味覚幻想」など。平成3年9月22日死去。83歳。東京出身。アテネ・フランセ卒。本名は片岡十一。

【引用2】「日影丈吉」という名前の由来（東雅夫編『幻想文学講義』、2012年）
日影 処女作の「かむなぎうた」を書いたのが昭和二十二、三年頃でね。戦争から還ってきて一度田舎にいて、また東京へ出てきた、だからまだなんにもないときですよ。（中略）そういうときに富山の薬売りが薬の箱をもってきて、年に一回くらい来ては中身を交換していくようになったんだ。たしか知りあいの魚屋の弟かなにかでね、その世話で来るようになったんだと思います。で、その薬箱に薬屋の名前が書いてある。それが日影ナニ吉って名前なんですよ。で、これはちょっといい名前だなと思って、一字変えて「丈吉」にしたんです。もとの名前が何吉といったか、忘れてしまいましたが……。
（後略）

※日影丈吉をミステリ研究会の例会で取り扱いたいと思った理由は大きく分けて2つある。1つは、日影丈吉がミステリと幻想小説との狭間に位置する様な作品を描いており、その関係性を考える価値があると思われる点。そして2つ目は、最近になって日影丈吉の作品がアンソロジーに収録されたり、短編集として刊行される機会が増えている点が挙げられるだろう（東雅夫編『幻妖の水脈』（2013年、ちくま文庫）収録「月夜蟹」、『日影丈吉傑作館』（2015年、河出文庫）、『日影丈吉 幻影の城館』（2016年、河出文庫）、『新編 日本幻想文学集成』第1巻（2016年、国書刊行会））。今回はその様な作品集の中から『日影丈吉傑作館』を取り上げた。「傑作館」と銘打ってある通り、日影丈吉の作品の中でも面白いと思える作品がミステリから SF、怪奇幻想小説、怪談とジャンルを超えて収録されている。今回はその中から、比較的ミステリ寄りの作品を3編と怪談・怪奇幻想小説寄りの作品を3編選択してみた。日影丈吉の作品の中で、一般的に二項対立的に考えられているミステリと怪談・怪奇幻想小説とがいかにして融合しているのかを前半3編から考え、後半の3編から、彼の非日常的な存在を描く際の作法の様な物を抽出してみたい。担当者の読みは、かなり癖があり、かつ恣意的な物であると思われるので、あくまでも参考程度に話を聞いて貰えれば嬉しい。尚、「かむなぎうた」と「人形使い」についてはやや力を入れて解説する。

- 「かむなぎうた」（初出：『別冊宝石』1949年12月）

〜その記憶は、長い年月のすぎた現在になっても、未だ醒めきらぬ、悪夢のようなものを残している〜

登場人物
<ul style="list-style-type: none"><li>私（笙太郎）：母を亡くし、東京から父親の故郷へとやって来た孤独な少年</li> <li>源四郎：私の友人・鍛冶屋の息子で私と同じく母を亡くしている模様・私によって老婆殺害の犯人と推定された・竹蜻蛉の使い手</li> <li>女の児：私と同級生かつ外部の人間・源四郎におしっこをひっかけられそうになるが難を逃れた・</li> <li>巫女の老婆：私の母の口寄せをした老婆・村へ来て口寄せをしている・怖いが実は好人物・事故で川へ転落死してしまう・実は源四郎とは親戚</li> <li>父：私の父</li> <li>母：私の母・故人</li></ul>

【引用3】千葉県における養蚕（『千葉県の歴史』通史篇近現代1、2002年）
（引用者註：千葉県では）1890年ころまではきわめて少ない産出量であった繭が、以後、ほぼ一貫して急速に生産をのばした（中略）全国にしめる千葉県の繭生産量の順位も、85年には29位と下位にあったが、90年代以降急速に上昇して、日露戦争後に11〜12位を保ち、関東地方では群馬・埼玉・茨城につぐ養蚕県となった（中略）。このように1890年代から1920年代ごろまで、養蚕業は県内にめざましく普及していったのである。

【引用4】千葉県における「いちこ」（『関東の民間信仰』、1973年）
青森県の恐山の「いたこ」は全国に有名な口寄せ巫女である。これに類する巫女は全国的に拡がっている。この千葉県もその例に漏れない。県の南部では「いちこ」と呼ばれ、北部では「口寄せ」といわねばわからない。いずれも最近まで存在していたことを知っていたが、近来はとんとそういう話は聞かなくなっている。（中略）この「いちこ」は人によって方法が違う。一つの流れみみたいな傾向はあるが、弓を鳴らす形、唱文または念仏による形、それぞれ方法は違っても死者への慕情を満足させるものがあつた。とくに海難に遭つた死者に対するものが多かつた。（後略）

【引用5】江戸川乱歩の評価（『日影丈吉全集』第六巻（2002年）解題（横山茂雄執筆）所収の「銚衡所感」より）
私が〇印をつけた七つの佳作のうちから第一位を選べといわれても、それには困らなかつた。むろん「かむなぎうた」であつた。他の本格作品はいずれも完璧性を欠いていたが、これはほとんど完璧の作品であつた。この作には私のいわゆる「奇妙な味」があつた。少年の妖気のようなものが巧みに描かれていた。これは犯人探しのゲーム小説ではないけれども、犯罪と推理はあるのだから、探偵小説の部類に加えてさしつかえなく、その小説技巧は断然他の本格作品を圧していた。

【引用6】舞台設定としての千葉県一松村（『日影丈吉全集』第六巻解説（横山茂雄執筆）より）
ところで、東京で生まれ育つた日影ではあるが、父方の祖父は九十九里の海に近い千葉県長生郡一松村の出身で、「かむなぎうた」の語り手の父を「しめじや松露の生える濡っぽい土壤」から産んだ土地、「太平洋の荒波が巻起こす汐風を、砂地に拡る薄暗い松林の蔭に避けた、ささやかな村」とは主として一松村に基づくものらしい。この村には、義兄（姉まつの夫）の実家もあり、昭和二十一年に台湾から復員してきた日影は、しばらくそこに身を寄せている。

【引用7】泉鏡花的な少年造形（東雅夫編『幻想文学講義』、2012年）
――日影さんの少年時代といえますと、「かむなぎうた」や「ふかい穴」などに出てくる、非常に感受性が強くてどこかもの淋しいようなイメージがありますが。
日影 多少やっぱり雰囲気は似てたかもしれませんね。「深い穴」に出てくる、上野でもって博覧会が開かれたりとか、そういうのは実際の経験ですね。
――「ふかい穴」の少年が憧れる美女のイメージなど、どことなく泉鏡花や谷崎潤一郎の初期作品を思わせるところがありますが。
日影 鏡花の影響はやっぱり受けてますね。若い頃やたらと読んでね、一度会いにいこうかと思ったことがあるくらいですから。

- 竹蜻蛉の役割：①トリックとしての意外性 ②子ども時代という過去を追憶する上でノスタルジー（過去への郷愁）を喚起させる道具
- ノスタルジーを喚起させる道具一覧：①養蚕→亡母追慕（過去の存在への追慕）へと繋がる ②竹蜻蛉

・養蚕に向けられた複雑な視線：①回顧する私にとっては過去の存在 ②過去の私にとっては都会と田舎の二項対立を発生させ心細さを煽ると共に、亡き母の遺品が収められる事によって亡母追慕幻想を作動させる道具ともなっている ③同時に、子ども時代と合致すると思われる大正期の千葉県においてはかなり新しい技術でもあり、子どもの頃の私はそれ自体にノスタルジーを喚起させられる訳ではなく、喚起させられているのはあくまでも回顧している私である

・源四郎の意味と草双紙：（「げんしろ」とも）盗むこと。ものをごまかすこと。もと人形浄瑠璃社会の隠語だったものが、一般化した語。
\*洒落本・遊客年々考〔1757〕「二年待ずに花香（はなが）をぬかし仕附の拵（こしらへ）取急ぐのは、源四郎追打やうに思われ最早（もはや）二度とはせぬことと」
\*黄表紙・金々先生栄花夢〔1775〕「手代源四郎、はじめは金々先生をそそなかし、おおく金銀おつかはせ、そのあまりはみなわが手へくすねける。よつて物をぬすむことお、げん四郎とは申也」
\*咄本・東都真衛〔1804〕とふせいじん「どろぼうを源四郎」
\*滑稽本・浮世床〔1813〜23〕二・上『『玄四老（ゲンシロ〈注〉ぬすみ）』したり』（『日本国語大辞典』より抜粋）
→私は亡き母の遺品である草双紙を読んでいた。それならば、この源四郎の意味を知っていても何ら不思議ではなく、また、草双紙への執着心を見せたその態度等も源四郎殺人犯幻想を喚起させた動力の1つと考えられるだろう。更に、源四郎の造形は「笙」という雅楽に用いる楽器を冠せられた私との好一對を思わせ、同時に都会と田舎との二項対立構造を煽る作用をも果たしている。

・**源四郎と笹太郎**：二項対立的な構図を上で指摘したが、同時に彼ら2人は1つの人格の分裂した形とも捉えられそうだ。2人はどちらも母を幼い頃に亡くしており、印象的な少女におしっこを引っかける事に失敗するシーンでも笹太郎は夢の中で自身が少女におしっこを引っかけている姿を幻視している。彼ら二人は善と悪の二項対立的存在であるが、その根元を共有している存在（ドッペルゲンゲル的な存在）なのであり、笹太郎の推理が展開される事は、その根元をも切り崩す危機的な状態であったと言えるのかも知れない。それ故に、2人にとって共通項である亡母が源四郎殺人犯説を幻想へと転換する必要性が生じて来る訳である。根を1つにした二項対立的存在の分裂の危機とその回避とがこの小説の1つのテーマなのかも知れないが、これは今後証明して行くべき事柄なのかも知れない。

・**巫女の役割**：亡き母の幻想を私に喚起させ、自らの死が招いた源四郎殺人犯幻想を打ち消させる事となった。

・**巫女の死という異常な状態を推理によって打開させようとした、その営み自体を幻想・悪夢として処理するラスト**

## 2 「東天紅」（初出：『宝石』、1957年1月） ～動機は何だろう——と私は考えた～

登場人物

私：田舎の親戚へ正月の祝い物を届けるためにやって来て、「幻想推理」を展開する

五兵どん：殆ど関係ないのに恐らく一番被害を蒙っている人物

五兵どんのおじもん（弟）：今回の惨殺事件の犯人・逃走中

ウメ：五兵どんのおじもんに首を切られて殺された娘・首が見つかっていない・祖母と姉と暮らしていた

筵売りの女：私が道中で一緒になった女性・挙動不審であったがウメの姉とは何の関係もなく、私の「幻想推理」の餌食となる

・「幻想推理」の展開によって、全く異なるベクトルの犯罪が明かされるという構図

・蜜柑箱の首から蜜柑箱の嬰兒への静かかつ鮮やかな展開

・「東天紅」をどう考えるか（特に回答を考えてないので、皆も考えて欲しい）

## 3 「吉備津の釜」（初出：『宝石』1959年1月） ～洲ノ木は耳の底で吉備津の釜の不気味な音が、警告するように鳴り出したのを聞いた～

登場人物

洲ノ木：電気機具の月賦販売がこけた人

川本：山崎の分身・詐欺行為が露見しそうになり、洲ノ木を偽装自殺の身代わりに仕立てようとして山崎が化けた仮の姿

山崎：川本の本体・金融会社の専務にして邪な悪人

祈祷師の男：洲ノ木が若い頃、近所に住んでいた男・彼に纏わる記憶と、その語る民話が洲ノ木の命を救う事に

【引用 8】納戸橋の怪物（『怪異・妖怪伝承データベース』掲載、中央大学民俗研究会「石川県石川郡鳥越村　調査報告書」（『常民』22号、1986年）より抜粋）  
ある男がドアイの淵で女から「納戸橋に立っている男に渡してくれ」と手紙を預かった。任誓様という高僧に出会ったので読んでもらおうと、「この男を捕って食べ」とあったので、「この男に福を与えよ」と書き直した。男が手紙を届けると、納戸橋の男が追いかけてきて、金袋を投げてきた。

【引用 9】河童の手紙（『怪異・妖怪伝承データベース』掲載、宮岡洋子「円岡邦枝媼の語る昔話―鳥取・中山町の昔話（一）―」（『伝承文学研究』22号、1979年）より抜粋）  
馬子が河童と相撲をとり、頭の皿の水をこぼさせて勝った。すると河童が大きい樽と手紙を託し、向こうの沼へ手紙を届けたら樽をあける鍵を渡すという。馬子は言われた通りにしようとして、途中で寺に立ち寄ったところ、和尚が河童のたくら

みに気づいた。樽に入っていたのは**99人分の人間の尻で、残り1つは使いの男で間に合わせるよう手紙に書かれていた。**

・**民話の巧みな活用**：①水上バスからバス（水から陸）  
②川の仲間（川本）にゃ手に負えぬ、陸の仲間（山崎）が殺ってくれ  
③人を狩るための手紙

・**巧みな語り部としての祈祷師**：民話と現実とが奇妙に混交し、それ故に洲ノ木の直面している現実へも入る事が可能となった

・**洲ノ木が狙われた理由**：本書140頁11行目

## 4 「人形つかい」（初出：『月下の一群』、1976年6月） ～彼がほんものの恐怖を感じたのは、この時だったのである～

登場人物

私：物語の語り手にして聞き手

豎野桑風：物語の話し手・体験者

娘：豎野の知り合いの娘・精神的に不安定で、寺に預けられている・豎野はその身を案じているが結局自殺してしまう

【引用 10】高山祭について（『日本大百科全書』より抜粋）  
**岐阜県高山市の春秋の祭り**。高山市を南北に分け、南は山王（さんのう）社（日枝（ひえ）神社）の氏子、北は桜山八幡（はちまん）（八幡神社）の氏子になっている。日枝神社の祭りは4月14、15日で山王祭といい、八幡神社の祭りは10月9、10日（もとは旧暦9月14、15日）で八幡祭といった。高山祭（山王祭と八幡祭）の特色は、豪華な屋台の練行（れんぎょう）である。本居宣長（もとおりのりなが）の弟子、田中大秀（おおひで）が、神社を復興し神事を盛大にするため始めたといわれており、文化・文政（ぶんかぶんせい）（1804～1830）のころ、舶来の織物や材料をふんだんに使い、彫刻の名人を抱え、莫大（ばくだい）な財力を投じて屋台30台をつくった。その後保存と修理に努めて、いまは春祭12台、秋祭11台が曳（ひ）き出される。四輪の台車の上に三段重ねの屋台を構えたもので、上段は4本柱に切妻屋根をかけ、中段には氈（せん）を巡らし、黒漆で全体を塗って金色の金具が打ち付けてある。上段には各町内で趣向を凝らした人形を設け、下の台の中で綱によって操作して踊りをさせるものもある。当日は神輿の渡御に続いてこの屋台を繰り出し、囃子（はやし）につれて市中を練る。この行事は、国の重要無形民俗文化財の指定を受けており、代表的な屋台は屋台会館に展示され、観覧することができる。[井之口章次]

【引用 11】高山祭の一部中止（『毎日新聞』岐阜版（岐阜県図書館所蔵）昭和40年（1965）11月4日付記事「くずれてゆく伝統」）  
高山祭は春と秋のまつりだが、ことしは三百年余の伝統を破って春だけになった。秋は台風シーズンだから、日が強くて塗料がはげるなどの理由だが、若い人たちの関心が薄くなったというのもその一つだ。（後略）

【引用 12】「高山祭り」問題（『岐阜日日新聞』（マイクロフィルム版、岐阜県図書館所蔵）昭和41年（1966）2月17日付記事「どうなる高山祭」）  
三百年余の伝統に意義を認めるか、生活の合理化に重きを置くかの大きな問題で解決のいとぐちをつかめぬままに行きづまったかっこうの「高山祭り」問題を話し合う懇談会が二十四日午後一時から高山市役所会議室で開かれる。「高山祭り」問題は二年前の「秋の高山祭り」が春と秋に分裂して開かれ、昨年はついに春に移行して開かれたことに関連するもの。つまり、「秋の高山祭り」＝八幡神社例祭で九月十四、五日に開かれていた＝をいままでどおり秋に開いて高山祭りを春、秋の二度開く案と、春、秋の祭りを一本化してしまうかの案のどちらを選ぶかが問題の中心。（中略）「八幡祭り」は昨年は「山王祭り」＝いままでの「春の高山祭り」が四月十四、五日＝に引き続いて四月十六、十七日に行われた。（後略）

【引用 13】「高山祭り」についてのアンケート（『朝日新聞』（岐阜県図書館所蔵）昭和 42（1967）年 5 月 2 日付記事「高山祭り」を春秋二回に）

（前略）高山祭は三十九年までは四月十四、五日の日枝神社例祭を中心とした春祭と九月十四日、十五日の八幡神社例祭を中心とした秋祭の二回にわかれていた。しかし秋祭はきびしい残暑で祭料理や屋台が痛むなどの理由で、八幡神社氏子代表や神社議員が四十年から例祭日を四月十六、十七日に変えた。こうして四日間の高山祭はことして三回続き、行事そのものは軌道に乗っているが「長くて後半がだらけてしまう」という声が出はじめた。商店街や旅館業者などの中でも「秋にこれといった行事がないので観光都市の看板が泣く」と不満をもらす人があるなど高山祭のあり方が話題にのぼりはじめた。このため同部会が市政に関係する人たちの考えを知るために選挙期間中に市長選の三候補、市議選の三十五候補にアンケートをした。この結果、市長候補者三人からは全部回答があり、新市長になった元仲氏も「春秋二回がよい」と答え、さらに「氏子、諸団体の意見をよく尊重していく」といっている。（後略）

【引用 14】恵比寿台について（ブログ『雄峯閣 一書と装飾彫刻のみかた一』（URL：http://www.syo-kazari.net/index.html）の「恵比寿台」の項目より抜粋）

恵比寿台はもともと「花子」と呼ばれていました。どのような姿かは未詳ですが、その後「殺生石」のからくりを乗せて改名、その後「殺生石」が消え、「恵比寿台」となりました。

この屋台は見所が多く、特に彫刻は目を見張るものがあります。上段から順に見ますと、屋根には鳳凰1対、破風には波、欄間には彩色された牡丹、恵比寿像が鎮座する後ろには鉾が飾ってあります。

中段欄間には波に飛龍の彫刻がびっしりと埋め尽くされ、欄干には素木の獅子の彫刻と彩色された牡丹の彫刻が見えます。下段には半月形の空間に龍が存在感を誇示しています。

そして何よりも背面に回ると、見返し幕のオレンジ人物図もさることながら、手長・足長の像ははまさに見どころ。少々グロテスクな感じさえますが、どこかしら愛嬌のある表情は江戸文化、ひいては飛騨の匠の技の魅せるものといっても過言ではないかと思えます。

【写真 1】恵比寿台の手長足長像（ブログ『雄峯閣 一書と装飾彫刻のみかた一』「恵比寿台」の項目より抜粋）

※著作権の関係から削除しました

【引用 15】幻想=現実に根差したもの（東雅夫編『幻想文学講義』、2012 年）

幻想小説といってもね、はたして自分がそういうもの書いてるのかどうかはつきりしないんですよ（笑）。（中略）たとえば幻想小説というものを、現実とは全然次元のちがうところでもって話を捜す小説であるというふうな見方をしたら、ぼくらが書くものは幻想小説ではないかもしれないですね。やっぱり現実というものに根ざして書いてますから。だけど現実でも見方によって、たとえばここにあるコップを画描きが普通に書けば、コップの形になるけれど、ピカソが描いたら、なんだかワケの分からない形になっちゃうでしょう。だけど、もとはやっぱり現実のコップなんですよ、そこに描かれるものが。だからもとは現実でも、その見方によってちがってくるというような意味での幻想というんなら、ぼくらの書くものとも合うわけなんだね。

【引用 16】「猫町」的な幻視の構造（萩原朔太郎「猫町」（岩波文庫『猫町：他十七篇』、1995 年、初出は『セルバン』1935 年 8 月号）

たとえば諸君は、夜おそく家に帰る汽車に乗ってる。始め停車場を出発した時、汽車はレールを真直に、東から西へ向って走っている。だがしばらくする中に、諸君はうたた寝の夢から醒める。そして汽車の進行する方角が、いつのまにか反対になり、西から東へと、逆に走ってることに気が付いてくる。諸君の理性は、決してそんなはずがないと思う。しかも知覚上の事実として、汽車はたしかに反対に、諸君の目的地から遠ざかって行く。そうした時、試みに窓から外を眺めて見給え。いつも見慣れた途中の駅や風景やが、すっかり珍しく変ってしまって、記憶の一片さえも浮ばないほど、全く別のちがった世界に見えるだろう。だが最後に到着し、いつものプラットホームに降りた時、始めて諸君は夢から醒め、現実の正しい方位を認識する。そして一旦それが解れば、始めに見た異常の景色や事物やは、何でもない平常通りの、見慣れた詰らない物

に変わってしまう。つまり一つの同じ景色を、始めに諸君は裏側から見、後には平常の習慣通り、再度正面から見たのである。このように一つの物が、視線の方角を換えることで、二つの別々の面を持つてること。同じ一つの現象が、その隠された「秘密の裏側」を持っているということほど、メタフィジックの神秘を包んだ問題はない。

・高山の景物：陣屋=高山陣屋（今も現存）  
飛騨国分寺  
一之町の郷土館=現在の飛騨高山まちの博物館

・問題の山車：手長足長がいる事から、恵比寿台であろうと思われる。但し、人形に関しては描写が合わない。

・ラストの妙：娘と怪異を結びつける読みが、最後に大きく変容し、初めて題名の意味が判る

5 「ひこばえ」（初出：『小説現代』1983 年）

～だが家はいま、 のんびりして貝があしを出すように足を出したのだ～

登場人物

私：事件の語り手・何故か瓦斯会社の出張所が気に入り、その一家の運命を看取る事に

荒木：私の知り合い・瓦斯会社の出張所に関する調査を進め、最後には菱田救出作戦を敢行する

菱田：瓦斯会社の出張所である家に残務処理の為に詰めている男・家族と一緒にだが最終的に彼も含めた全員が死亡する

妻：菱田の妻・結核を患っている・家の最初の被害者

息子：菱田の息子・家の 2 番目の犠牲者

・怪奇小説の館物の系譜と怪物物の系譜を引く作品

・生気を吸い取られて体が半分になってしまう趣向→アガサ・クリスティ「最後の降霊会」（『死の猟犬』（1933 年）所収）

・ひこばえ：植木の管理上の用語。樹木の根元にある不定芽から出る徒長枝のことで、一名やごともいう。成長力が旺盛なため幹の肥大が悪くなるので、ひこばえが伸び出したらすぐに切除することが望ましい。「ひこ」は曾孫からきた語。やごはその愛称で、地方によってはやご吹きともよぶ。[堀 保男]（『日本大百科全書』より抜粋）

・未完成故に永遠性を獲得する建物の伝承：知恩院「忘れ傘」、日光東照宮陽明門「逆柱」等  
この家もまた、未完成ゆえに永遠に生き続けるのだろうか  
あるいは、その象徴としての「ひこばえ」か

・家という本来は人を寛がせ守る筈の存在が人を喰らい成長するという逆転の構図

→そしてまた、気づかぬ内に、語り手の私もまた、家の引力に引き寄せられて徐々に家へと近づき、終には家の中に入り込んでしまっている事に注意

→私はもう終わった事と考えているが、もしかすると家にとっては新しい餌食を得たという事なのかも知れない

6 「泥汽車」(初出:『泥汽車』(白水社)、1989年)  
～「みんな、どこかで生きてるよ」と、頬の赤い女の子はこたえた～  
登場人物

私: この物語の語り手

小父さん: 泥汽車の車夫・海から泥を持って来て森を埋め立ててしまう

森に棲むモノ達: 埋め立てられた森に棲んでいたモノ達・最後には人間社会に溶け込んで生きている事が明かされる

- ・**泥汽車とは何か**: 近代の象徴・環境破壊のメタファーか
- ・**私の通う学校**: 私の住む町の端っこであり、同時に東京という都会の端っこ、フロンティアであった  
その向こうへと続く草原・大名屋敷と森・泥を含んだ海
- ・**ムーサイ**: ギリシャ神話で、ゼウスとムネモシュネの9人の娘。この9人の個々の名前に、ギリシャの学問・芸術の諸分野、恋愛詩、抒情詩、叙事詩、歴史、悲劇、賛歌、舞踊、喜劇、天文学が結び付けられている。(『集英社世界文学大事典』より抜粋)
- ・**近代によって幻想は壊され得るのか**: 森に棲むモノ達は、結局人間社会へ溶け込んで生きている・近代は幻想や前近代を殺し得るのかという1つの大きな問題が、明治から平成までを生きた作者の晩年に顕れるのは興味深い
- ・**結論**: 良く判らない・これもまた、皆がどう読んだのかを知りたい作品だが、今回の中では最も読むのが難しい作品であるのもまた事実・日影の全集を読み解かないと難しいかも知れない

最後に～いろいろ言ってみただけど～

「初めに」で述べた通り、日影丈吉はミステリと怪談・怪奇幻想小説とが巧みに合わさった独特の風味を持った作家である。ミステリ研究会の人たちがこれをどの様に読むのかは、怪談・怪奇幻想小説側の人間としてはかなり気になる所であり、それ故に選定したところが大きい。

また、個人的に興味を覚えている作家なので、その中でも気に入っている作品をやや突っ込んで探索してみた。結局ミステリ物だとして選定した作品も、そんなにミステリ的な部分に触れずに終わってしまった感があるが、そこはまあ、担当者の特性という事で許して欲しい。ただ、好きな作品についてミステリにしる他ジャンルにしる探索を深める事で、豊かな読みを他の会員も展開して欲しいと思う。